

【UD 関西・研究会レポート】第 18 回研究会

記録者：坂田 愛

■氷がはる寒さの 12.13（金）関西学院初等部にて『第 18 回 UD 研究会 in 関西』が開催されました。今回初めての試みで、公開授業を二本続けて行いました。なんと申し込み受付告知から 1 日で満席になりました。定員いっぱいの 102 名の先生方がご参加。やむなくお断り差し上げた皆様には申し訳ございませんでした。初めてこの UD 研究会 in 関西にご参加いただいた方もいらっしゃいましたが、続けて参加していただいている方々も多数いらっしゃってまた一緒に勉強させていただけたことが嬉しかったです。ありがとうございました。

【①公開授業】

■関西学院初等部の河内牧子先生による、6 年生の国語科授業でした。学習材は『森へ』。物語でもなく、説明文でもないこの随筆は、子どもたちにとってあまり馴染みのない文章です。読み取っていく切り口として、擬人法に注目させて筆者の心情を理解するという大胆な展開。子どもたちは、擬人法から感じる自分の印象と作者の心情を重ね合わせて行くことで作者の心情が変化に気づけました。後半は、その変化のきっかけとなったものを本文から挙げていきました。複数の事象からじわじわと筆者の思いが変化してきたことをつかみ、このような文章が随筆だということを学びました。



反省点としては、教師のしかけによって気づいた子どもの発言から授業の流れを作っていくことができなかつた点や発問を繰り返してしまった点が挙げられました。また、後半子どもたちの意見をたくさん出させ、拡散されたものの、はっきりと整理されないまま、まとめへと進んでしまったので、子どもの言葉を価値付け、整理することではっきりと収束させるべきだったとの反省もありました。

しかし、擬人法のカードの出し方や子どもたちに考えをアウトプットさせる方法にもたくさんの工夫があり、子どもたちを意欲的に課題へ導く素晴らしい授業でした。

【②公開授業】

■筑波大学附属小学校の桂聖先生による5年生の国語科授業でした。学習材は『千年の釘にいどむ』です。国語授業のユニバーサルデザインの視点から、「教材の仕掛け作り」を提案されました。



教材にしかけをつくる国語授業「10の方法」

- | | | | | |
|---------|----------|--------|-------|-------|
| ①順序を変える | ②選択肢をつくる | ③置き換える | ④隠す | ⑤加える |
| ⑥限定する | ⑦分類する | ⑧図解する | ⑨配置する | ⑩仮定する |

本時では三つのしかけがありました。しかけⅠ「文章構成の型を図解する」ことで文章構成への課題意識を引き出す。しかけⅡ「要点の置き換えや選択肢づくりをする」ことで、学習意欲を持たせながら、文章の内容の概要を確認。しかけⅢ「文章構成の型の詳細を図解する」ことで、まとめの位置を意識しながら、文章構成の新たな呼び方を発想させました。

スクリーンに映される図解はすっきりとして見やすく、今まで学習してきた内容を思い出させ、しっかりと整理できました。“頭括型”“尾括型”“双括型”をぼんやりとしか思い出せない子（特別支援が必要な子）にとっても、この図解は大変有効です。全体をこれから同じ課題に向かわせるために、始めは全員が分かることが大切です。ペア活動を取り入れながら、共有をはかり、全員が「この文章の形はどれに当てはまるのだろう」と課題意識が持てました。



各事例の要点をまとめたカードは、本文とは違う部分を見つけたり、写真と事例の説明を関連付けたりすることで、説明内容の概要を確認できました。中には要点の運試しとして二枚のカードを出し、その当たりを決めることで楽しみながらキーワードや中心文を探す活動となりました。本時のめあてに必要な材料が揃ったところで、文章構成を振り返ります。「今までの習ってきた形となんだか違う」理由を語りながら、今まで習ってきた文章構成と比べます。子どもたちが出した結論は「とび一括型」。尾括型のまとめの部分が、始めの部分に飛んで入り込んでいるからということです。ユニークな子どもたちの発想を楽しみながら丁寧に取り上げ、子どもたちの言葉で本時のまとめをされました。子どもたちにとっても、聞いていた私たち教員にとっても印象深く、楽しい授業で、大変勉強になりました。

事後の講演の中で、「クラスの実態やレディネスによって授業を変えなければいけない。」「ユニバーサルデザインは子どもが出発点」とお話をされたことも印象的でした。まさに先

生の授業は、目の前の子どもたちに合わせて手立てや細かい言葉がけを変えていく、きめ細かな支援の見える授業でした。

【③研究協議会】

■司会の久木田雅義先生（関西学院初等部）がスマートなユーモアを交えながら、朗らかに進行しました。河内先生の授業の振り返りを国語科の視点で野村真一先生（関西学院初等部）が説明しました。6年生の今までの授業の積み重ねからもお話され、物語は作者、説明文は筆者。随筆ははっきりとした定義がないため、子どもたちが作った“筆作者”というネーミングをつけたことなど、今までの経緯などもはなされました。

質問の中に“話者”と呼ばせるのはどうなのか？との質問をいただきましたが、随筆でははっきりとした定義がないため、“話者”と呼ばせるのは意味が混ざり、子どもたちを混乱させることにつながるため、あえて子どもたちが作った新しいものを採用することが大切と考えたと答えました。

また、石塚謙二先生（大阪府豊能町教育長）は、特別支援教育とユニバーサルデザインの視点を持った授業との違いをわかりやすく教えていただきました。

特別支援教育：A君B君に完全に合わせる

UD化：A君B君を想定して、一斉授業を作る

今回の河内先生の授業では、擬人法に絞り込んで本質に迫っており、大変有効だったと述べられました。



【④ご講演・桂聖先生】

■本時の授業についての解説をされた後、生き物は円柱形の教材を用いて模擬授業形式で講演が行われました。文章を一読した後、『考える音読』からいくつかの音読を紹介。ゲームのように楽しみながらもある程度の緊張感をもって読む音読。スラスラ型から理論型まで様々な読み方を体験しました。大人の私たちでもドキドキワクワクしながら、音読を楽しみました。



次は、本時でも取り入れられた、各段落の正しい要点を選ばせるというしかけで、各段落の要点を捉えていきました。要点の運試しという言葉にも楽しさが溢れ、必死になってあたりとなるキーワードをペアで話し合ってみつけました。さらに、そのカードのなかにはキーワードのほかに、“抽象”と“具体”を入れてあるカードがありました。すなわち、抽象がまとめて要点にふさわしいことを知る学びへとつながっていくのです。他にも YES but 法なども含まれていました。同じパターンで慣れさせ、共有を図るだけでなく、実は少しずつレベルを上げているというスモールステップが匠に仕掛けられているのでした。

最後に、もうひとつのしかけがあることを紹介。実は、本文の最後の一文隠されていたのです。改めて自分たちがつくってきた要点を確認しながら、文章構成に目を向けました。もしも頭括型なら…と想定して、違うものを省いていきます。もちろん自然と話し合いが生まれ、全員で課題を達成できました。本当にあつと言う間の時間で、とにかく楽しい！わかって嬉しい！隣の方にありがとう！そんな気持ちがワッと溢れました。きっと子どもたちも同じ気持ちになるでしょう。私も明日はこんな授業がしたいと気持ちが高められる素晴らしい講演でした。



【⑤懇親会】

■本校から歩いてすぐの会場にて、懇親会が行われました。桂先生、石塚先生と約40名の先生方が参加。本時の授業についての話だけでなく、各先生方が抱えていらっしゃる疑問や質問を直接聞くことができました。特別支援教育にずっと携わって来た方もいらっしゃるのので、自分のクラスの気になる子についてどのような手立てが有効なのかを教えていただいたり、一緒に考えたりもしました。ベテランの先生も若い先生も「明日の授業作り」の語らいに、熱くなり、親睦を深める時間となりました。

【⑥おわりに】

今、ユニバーサルデザインは大変注目され、各地域で広まりつつあります。共に学びながら明日の子どもたちのために考えていけたら嬉しく思います。

次の開催は2月22日(土)。4年国語(元山一則先生・関西学院初等部)と6年算数(西健明先生・関西学院初等部)が授業を公開。また本校にて2月15日学校公開会を行います。UDの視点を取り入れた授業が多い公開です。(申し込みは関西学院初等部HPより)皆様のご参加をお待ちしております。

関西学院初等部 HP

http://www.kwansei.ac.jp/elementary/news/2013/news_20131202_008579.html